



# 「十字靭帯損傷」になりやすい年齢ってある？

## ■十字靭帯損傷による通院割合・手術割合の年齢推移（0～10歳）

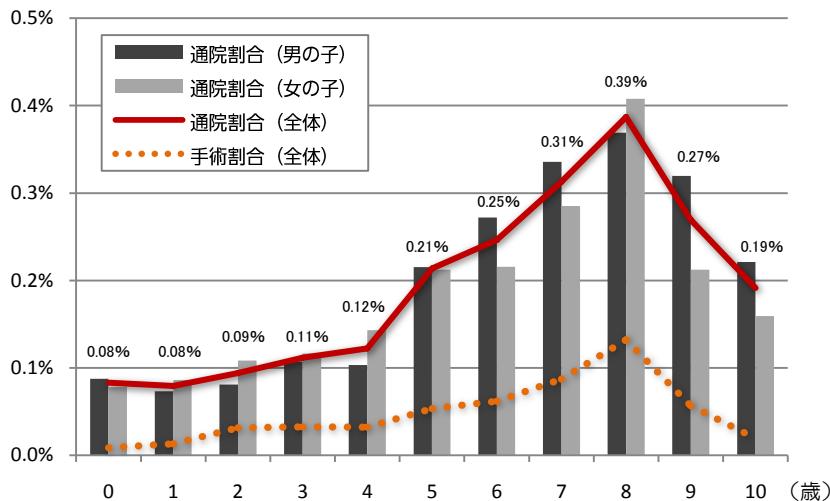
2010年度（2010/4/1～2011/3/31）にアニコム損保の「どうぶつ健保」契約を開始した0～10歳の犬について、十字靭帯損傷（十字靭帯断裂(前/後)含む）での通院割合・手術割合を調査しました。

※十字靭帯とは…大腿骨（太ももの骨）と脛骨（すねの骨）を結び、膝関節を安定に保つ役割をもっています。左右の膝関節それぞれに、前十字靭帯と後十字靭帯の2つが存在しています。

その結果、4歳までは0.1%前後で推移する通院割合が、5歳以降加齢にともない上昇することがわかりました。これは、4歳から5歳の時期というのが、それまでに蓄積されてきた靭帯の消耗などが症状としてあらわれやすいといったことなどが原因として考えられます。

また通院割合・手術割合とも8歳がピークで、高齢になると低下する傾向にありました。十字靭帯損傷の発生要因のひとつは活動性です。そのため、8歳を過ぎると活動性の低下とともに通院割合も低下するものと考えられます。

十字靭帯損傷の症状として一番多いのは、足をひきずる（跛行）などの歩き方の異常です。また膝蓋骨脱臼などの基礎疾患や加齢が、発生のリスクを高めていると言われています。普段からお子様の歩き方をよく意識して、少しの変化でも気づいてあげられるようにすることが大切です。



※2010年度に「どうぶつ健保」契約を開始した犬292,290頭（0～10歳）を対象に、十字靭帯損傷（十字靭帯断裂(前/後)含む）での通院割合・手術割合を年齢別に調査しました。

※グラフ内のパーセンテージは、各年齢における通院割合（全体）を示しています。

**4歳をすぎたら、膝の疾患に注意！**



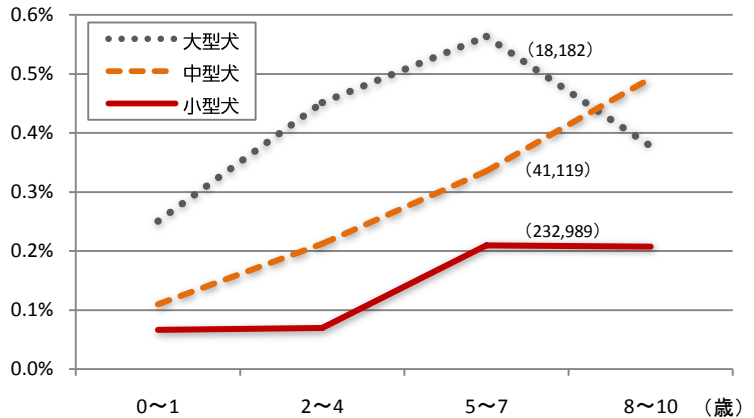
# 「十字靭帯損傷」はどんなわんちゃんに多い？

## ■犬の体重別に見た十字靭帯損傷による通院割合（0～10歳）

2010年度（2010/4/1～2011/3/31）にアニコム損保の「どうぶつ健保」契約を開始した0～10歳の犬について、小型犬・中型犬・大型犬に分けて十字靭帯損傷（十字靭帯断裂(前/後)含む）での通院割合を調査しました。

その結果、全年齢を通して小型犬よりも中型犬・大型犬の方が、通院割合が高い傾向にあることがわかりました。

十字靭帯損傷は、体重がかかるなどの物理的な負荷も発生要因になりうるため、こうした傾向があらわれると考えられます。



※グラフ中の ( ) 内の数字は、犬の大きさごとの0～10歳の契約頭数を示しています。  
 ※各犬種の標準的な体重を基に、小型犬（10kg未満）、中型犬（10～20kg未満）、大型犬（20kg以上）の3種に分類しました。

## ■5歳の小型犬における犬種別通院割合

4歳までと比べて通院割合が上昇する5歳の犬のうち、契約頭数が多い小型犬の小型犬に着目し、犬種別に通院割合を調査しました。

その結果、5歳の小型犬の平均通院割合が0.19%なのに対し、ヨークシャー・テリアが特に高い通院割合を示すことがわかりました。

また右表の通り、他にも高い割合を示す犬種がありました。

このように、犬種によって発生の頻度が異なるということがわかりました。

犬種	通院あり	契約頭数	通院割合
ヨークシャー・テリア	10	993	1.01%
ウエスト・ハイランド・ホワイト・テリア	1	118	0.85%
マルチーズ	3	451	0.67%
ジャック・ラッセル・テリア	2	454	0.44%
ミニチュア・シュナウザー	3	902	0.33%
パグ	1	381	0.26%
混血犬(体重10kg未満)	2	790	0.25%
トイ・プードル	8	3258	0.25%
パピヨン	2	1072	0.19%
チワワ	7	4032	0.17%
キャバリア・キング・チャールズ・スパニエル	1	653	0.15%
ポメラニアン	1	725	0.14%

**中型犬・大型犬と、ヨークシャー・テリアは、膝の疾患に注意！体重管理にも気をつけましょう。**